日蓮大聖人御書全集

ずいそうごしよ

瑞相御書

新版
1550
〜
1553

瑞相御書

けんじがんねん

建治元年('75)

さい

54歳

しじょうきんご

(四条金吾)

そ てんぺん しゆにん

驚

ちよう しょにん

夫れ、天変は衆人をおどろかし、地天は諸人をうごかす。

ほとけ ほけきよう 説

たも とき ごずいろくずい 現

たも

仏、法華経をとかんとし給う時、五瑞六瑞をげんじ給う。

なか じどうずい もう

だいちろくしゆ しんどう ろくしゆ もう

その中に地動瑞と申すは、大地六種に震動す。六種と申す

てんだいだいし もんぐ さん しゃく い とうゆさいもつ

は、天台大師、文句の三に釈して云わく「東涌西没とは、

とうほう あお かん つかさど かん まなこ つかさど さいほう しろ はい

東方は青、肝を主る。肝は眼を主る。西方は白、肺を

つかさど はい び つかさど げんこん くだくしよう びこん

主る。肺は鼻を主る。これ眼根の功德生じて鼻根の

ぼんのうたが めつ あらわ びこん くだくしよう

煩惱互いに滅することを表すなり。鼻根の功德生ぜば、

まなこ なか ぼんのうたが めつ よかた ゆもつ よこん しょうめつ
眼の中の煩惱互いに滅す。余方の涌没して余根の生滅を

あらわ うんぬん みようらくだいし う い
表すことも、また」云々。妙楽大師、これを承けて云わ

こん あらわ い まなこ はな どうざい あらわ じ
く「根を表すと言うは、眼・鼻はすでに東西を表す。耳・

ぜつ り なんぼく たい ちゅうおう ところ しほう み
舌は理として南北に対す。中央は心なり。四方は身なり。

しん しこん ぐ ところ し えん ゆえ ところ
身に四根を具す。心はあまねく四を縁ず。故に、心をも

しん たい ゆもつ うんぬん
つて身に対して涌没となす」云々。

そ じつぼう えほう しゆじよう しょうほう えほう かげ
夫れ、十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のご

しょうほう たい み かげ しょうほう え
とし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば依

ほう しょうほう えほう げんこん
報なし。また正報をば依報をもつてこれをつくる。眼根を

とうほう

ば東方をもつてこれをつくる。

した なんぽう

舌は南方、鼻は西方、耳は

ほつぼう

み しほう ところ ちゅうおうとう

知

北方、身は四方、心は中央等、これをもつてしんぬべし。

しゅじょう ごこん 破

しほう ちゅうおう

かるがゆえに、衆生の五根やぶれんとせば、四方・中央

驚

こくど

験

おどろくべし。されば、国土やぶれんとするしるしには、ま

やま 崩

そうもく 枯

こうが 尽

徴

ひと まなこ みみ

ず山くずれ、草木かれ、江河つくるしるしあり。人の眼・耳

とうきよう

騷

てんぺん

ひと ところ

動

ちどう

等驚そうすれば天変あり、人の心をうごかせば地動ず。

きようぎよう

ろくしゅどう

いつさいきよう

そもそも、いずれの経々にか六種動これなき。一切経

ほとけ 説

たま

ほとけ

を仏とかせ給いしに、みなこれあり。しかれども、仏、

ほけきよう

説

たま

ろくしゅしんどう

しゆ

殊

法華経をとかせ給わんとて六種震動ありしかば、衆もこと

驚

みろくぼさつ

うたが

もんじゆしりぼさつ

答

におどろき、弥勒菩薩も疑い、文殊師利菩薩もこたえしは、

しよきよう

ずい だい ひさ

うたが

だい けつ

諸経よりも瑞も大に久しくありしかば、疑いも大に、決し

難

ゆえ

みようらくい

だいじようきよう

がたかりしなり。故に、妙楽云わく「いずれの大乗経に

しゆ あつ

ひかり はな

はな ふ

じ どう

か、衆を集め、光を放ち、花を雨らし、地を動ぜざらん。

だいぎ しよう

とううんぬん

しやく ところ

ただし、大疑を生ずることなし」等云々。この釈の心は、

きようぎよう

じよ そうら

おお

無

いかなる経々にも序は候えども、これほど大いなるはな

てんだいだいしい

せにんおも

くもか

しとなり。されば、天台大師云わく「世人以えらく、蜘蛛掛

すなわ

よろこ

きた

かんじやくな

すなわ

こうじんいた

しよう

かれば則ち喜び来り、鴉鵲鳴けば則ち行人至ると。小

しるしあ

だい

ずいな

ちか

すらなお徴有り。大いずくんぞ瑞無からん。近きをもつて

とお あらわ とううんぬん

遠きを表す」等云々。

そ いちだいにしじゅうよねん あいだ

夫れ、一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて、法華経

しやくもん 説 たま うえ ほんもん もう にぜん

の迹門をとかせ給いぬ。その上、本門と申すは、また爾前

きょうぎよう ずい しやくもん たい おお だいずい

の経々の瑞に迹門を対するよりも大いなる大瑞なり。

だいほうとう じ 踊 出 じゆせんがいだいじ 並 い

大宝塔の地よりおどりいでし、地涌千界大地よりならび出

だいにしんどう おおかせ たいかい ふ おおやま おおなみ

でし大震動は、大風の大海を吹けば大山のごとくなる大波

蘆 葉 しょうせん 追 帆

のあしのはのごとくなる小船のおいほにつくがごとくな

じよほん ずい みろく もんじゆ と ゆじゆつぽん

りしなり。されば、序品の瑞をば弥勒は文殊に問い、涌出品

だいずい じし ほとけ と みようらくしやく

の大瑞をば慈氏は仏に問いたてまつる。これを妙楽釈し

て云わくい「迹事は浅近なれば、文殊に寄すべし。本地は裁ほんじ ことわ

り難し。故にただ仏のみに託す」云々。迹門のことは、仏ほとけ

説き給わざりしかども、文殊ほぼこれをしれり。本門のこほんもん

とは妙徳すこしもはからず。この大瑞は在世のことにてみょうとく

候。

仏、神力品にいたって十神力を現ず。これはまた、さほとけ じんりきほん じゅうじんりき げん

きの二瑞にはにるべくもなき神力なり。序品の放光は東方にずい 似 じんりき じよほん ほうこう とうほう

万八千土、神力品の大放光は十方世界。序品の地動はただまんはっせんど じんりきほん だいほうこう じつぽうせかい じよほん じどう

三千界、神力品の大地動は、諸仏の世界、地皆六種に震動す。さんぜんかい じんりきほん だいちどう しよぶつ せかい じみなろくしゆ しんどう

よ ずい

じんりきほん

だいずい

ほとけ

余の瑞もまたまたかくのごとし。この神力品の大瑞は、仏

めつごししょうぞうにせんねん過

まつぼう

い

ほけきよう

かんよう

の滅後正像二千年すぎて、末法に入つて法華經の肝要の

広

たも

だいずい

きようもん

い

ほとけめつど

ひろまらせ給うべき大瑞なり。經文に云わく「仏滅度し

のち

よ

きよう

たも

ゆえ

しよぶつ

みな

て後に、能くこの經を持たんをもつての故に、諸仏は皆

かんぎ

むりよう

じんりき

げん

とううんぬん

い

歡喜して、無量の神力を現じたもう」等云々。また云わく

あくせまつぼう

とき

とううんぬん

「惡世末法の時」等云々。

うたが

い

そ

ずい

きつきよう

いっとき

疑つて云わく、夫れ、瑞は吉凶につけて、あるいは一時

ふたとき

いちにちにち

いちねんにねん

しちねん

二時、あるいは一日二日、あるいは一年二年、あるいは七年

じゆうにねん

にせんよねんいご

ずい

十二年か。いかんが二千余年已後の瑞あるべきや。

こた い しゅう しょうおう ずい いっせんじゅうごねん はじ 合

こた い 答えて云わく、周の昭王の瑞は一千十五年に始めてあ

きりきおう ゆめ にまんにせんねん はじ

えり。訖利季王の夢は二万二千年に始めてあいぬ。あに

にせんよねん さき 現 うたが

二千余年のこの前にあらわるるを疑うべきや。

と い ざいせ めつご ずいだい

問うて云わく、在世よりも滅後の瑞大なる、いかん。

こた い だいち どう ひと ろっこん うご

答えて云わく、大地の動ずることは人の六根の動くによる。

ひと ろっこん うご だいしょう だいち ろくしゆ こうげ

人の六根の動きの大小によつて大地の六種も高下あり。爾

ぜん きようぎよう いっさいしゆじよう ぼんのう 破 まこと

前の経々には、一切衆生、煩惱をやぶるようなれども、実

いま ほけきよう がんぼん むみよう だいどう

にはやぶらず。今、法華経は、元品の無明をやぶるゆえに大動

まつだい ざいせ あくにんた た

あり。末代はまた在世よりも悪人多々なり。かるがゆえに、

在ざい世せいの瑞ずいにもずいすずいぐずいれてずいあるずいべきずいよしずいを示ずい現げんし給たまう。

疑ぎつてぎ云うわく、証しょう文もんいいかん。

答こたえてこた云うわく、「ししかもしこのこ経きやうは、如に来よの現げんに在いますすすら

なおおお怨おん嫉しつ多おし。いいわんわんや滅めつ度どして後のちををや」等とう云うん々ぬん。去いぬる

正しょう嘉か・文ぶん永えいの大地おお震じしん・大だい天てん変へんは、天てん神じん七しち代だい・地ち神じん五ご代だいはさ

ておにんきぬ、人にん王のう九く十じゅう代だい二に千せん余よ年ねんが間あいだ、日に本ほん国こくにいまだなき

天てん変へん地ち天てんなり。人ひとの悦よろこび多た々たなれば、天てんに吉きち瑞ずいをあらわし、

地ちに帝たい釈しゃくの動どうあり。人ひとの悪あく心しん盛さかんなれば、天てんに凶きやう変へん、地ちに

凶きやう天てん出しゅ来たいす。瞋しん恚にの大小だいしやうに随したがつて天てん変へんの大小だいしやうあり。地ち天てん

もまたかくのごとし。今、日本国、上一人より下万民にいた

いま にほんこく かみいちにん

しもばんみん

だいかくしん

しゅじょうじゅうまん

あくしん こんぼん にちれん

るまで、大悪心の衆生充滿せり。この悪心の根本は、日蓮

お

によりて起これるところなり。

しゅごこつかいきよう

もう

きよう

ほっけいご

きよう

あじやせおう

守護国界経と申す経あり。法華以後の経なり。阿闍世王、

ほとけ

参

い

わ

くに

だいかんぼつ

おおかぜ

たいすい

ききん

仏にまいりて云わく「我が国に大旱魃・大風・大水・飢饉・

えきびよう

ねんねん

お

うえ

たこく

わ

くに

攻

疫病、年々に起こる上、他国より我が国をせむ。しかるに、

ほとけ

しゅつげん

たま

くに

と

そうら

仏の出現し給える国なり、いかん」と問いまいらせ候い

ほとけこた

のたま

よ

よ

だいおうよ

しかば、仏答えて云わく「善きかな、善きかな。大王能く

と

なんじ

おお

ぎやくぞい

なか

ちち

この問いをなせり。汝には多くの逆罪あり。その中に、父

を殺し、提婆を師として我を害せしむ。この二罪大いなる故、

だいなんきた

むりよう

なか

わ

かかる大難来ること、かくのごとく無量なり。その中に、我

めつご

まつぼう

い

だいは

そう

こくちゆう

じゆうまん

が滅後に末法に入つて提婆がようなる僧、国中に充満せ

しょうほう

そういちにん

か

あくそうとう

しょうほう

ひと

ば、正法の僧一人あるべし。彼の悪僧等、正法の人を

るざい

しざい

おこな

おう

きさきないしばんみん

によ

おか

ほうぼうしや

流罪・死罪に行つて、王の後乃至万民の女を犯して謗法者

しゆじくに

じゆうまん

こくちゆう

しゆじゆ

だいなん起

のち

の種子国に充満せば、国中に種々の大難おこり、後には

たこく 攻

説

そうろう

いま

よ

ねんぶつしや

他国にせめらるべし」ととかれて候。今の世の念仏者か

そうろううえ

しんごんしとう

だいまん

だいはだつた

くのごとく候上、真言師等が大慢、提婆達多に

ひやくせんまんおくばい

そうろう

百千万億倍すぎて候。

しんごんしゆう ふしぎ 粗々もう たいぞうかい はちよう くそん
真言宗の不思議あらあら申すべし。胎蔵界の八葉の九尊

え うえ 登 しょうつ おんかお 踏
を画にかきて、その上にのぼりて、諸仏の御面をふみて

かんじよう もう おこな ふぼ かお てんし いただき
灌頂と申すことを行うなり。父母の面をふみ、天子の頂

をふむがごとくなる者、もの こくちゆう じゅうまん 国中に充満して、じようげ し 上下の師とな

れり。いかでか国くにほろびざるべき。

よ いちだいじ ほうもん もう
このこと、余が一大事の法門なり。またまた申すべし。

先 書 そうろう 甚 ひと 仰
さきにすこしかきて候。いとう人におおせあるべからず。

便 ころ いちどに ど
びんごとの心ざし、一度二度ならねば、いかにとも。